

ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助

一一 木 博 史

1 はじめに

ここに一枚の写真⁽¹⁾がある。一九二五年一〇月、張家口で内モンゴル人民革命党第一回大会が開かれた時の記念写真だ。前列の七人は中華民国内のモンゴル人だが、後列の三人は内モンゴル革命を支援するために国外から参加した人々である。後列の三人のうち、真中の人物はモンゴル人民革命党委員長ダムバドルジで、向って左側の人物はモンゴル革命青年同盟中央書記ボヤンネメフだ。ダムバドルジもボヤンネメフも一九二一年の外モンゴルの革命で重要な役割を果たしている。前者は二一年三月の第一回党大会で、三名から成る執行部の一員に選ばれ、キャフタ解放戦にも参加し、同年後半には西部地方で対

白軍戦を指導した。ボヤンネメフは二一年当時、イルクーツクのコミンテルン極東書記局でモンゴル最初の革命紙『モンゴリン・ウネン』の発行に従事していた。

このような経歴の外モンゴルの革命家が内モンゴルの党の大会に出席したことは、単なる偶然で一つのエピソードに過ぎないのだろうか？ それとも外モンゴルの内モンゴル革命援助を象徴的に示しているのか？

本稿で扱うテーマは、右の問いに直接関わる。ダムバドルジ政権と内モンゴルの革命グループの関係を一次資料、あるいはそれに準ずる資料に基づいて分析し、その性格を明らかにするのが、本稿の課題である。

2 ダムバドルジ政権の成立

ツェレンオチリーン・ダムバドルジ（一八九九～一九三四年）がモンゴル人民革命党（一九二五年三月以前の名称はモンゴル人民党）の委員長として党、国家を指導していた時期（一九二四～一九二八年）を「ダムバドルジ政権の時代」と呼ぶことは、決して一般的ではない。

それはこの時代のダムバドルジに対するモンゴル本国の公式評価が『右派、民族主義者』であり、彼の指導性を強調する表現も避けられているからである。第五回党大会（一九二六年）頃から右派的傾向があらわれ、その傾向は一九二七～二八年にさらに強まり、第七回党大会（一九二八年一〇～十二月）で粉碎された、というのが『党史』⁽²⁾をはじめ、この時代の歴史を扱った概説書、研究書が一致して述べているところである。一九二四、五年に關しては、当時の『党』の政策は、おおむね正しかったとされるが、その評価がダムバドルジの名前と結びつけられることは少ない。例えば、D・ダシの論文「一九二五～二七年の中国革命とモンゴル人民共和国の國際主義的政策」⁽³⁾（一九七七）は、一九二五～二七年の党の内モンゴル人民革命党、中国国民党、馮玉祥に対する援助を積極的に評価した画期的論文だが、この中には実

際に政策を推進したダムバドルジの名前は一度も出てこない。

しかし、一九二四～二八年を「ダムバドルジ政権の時代」として一まとめに扱うことは、次の理由から正当化されるはずだ。第一に、党の政府に対する指導が確立されていたので、党の最高責任者の権力がきわめて大きかったこと。第二に、この期間を通じて、党委員長ダムバドルジ、副委員長ジャダムバー、書記ゲレクセンゲという党最高指導部の顔ぶれが変らなかつたこと。第三に、当時の対外關係において最も重要だつた対内モンゴル人民革命党、対馮玉祥、対コミンテルンのいずれの問題においても、ダムバドルジ自ら当事者として交渉に當つたこと。

ここで、ダムバドルジ政権の成立に至る経緯を簡単に記しておこう。ダムバドルジはすでに一九二二年に一度党委員長に就任したことがあるが、まもなくB・ダンザン（いわゆるヤボン・ダンザン、漢名は巴丹增⁽⁴⁾）にその地位をゆだね、レニングラードに留学した。再び党委員長に就任したのは、第三回党大会（一九二四年八～九月）においてである。

この年（一九二四年）の五月二〇日、国王ボグド・ハーンが死去した。党中央幹部会は、二週間後の六月三日に人民共和国への移行を決定した。続いて六月七日に中央委総会で同じ決定がなされ、六日後の六月一三日には政府決議が出された。正式には同年十一月の憲法採択をもって人民共和国は成立するが、六月の段階ですでにその方針は、ゆるぎないものだった。混乱なしに人民共和国への移行が行なわれた背景には、人民党の政府指導の体制がすでに活仏死亡の前から確立されていた事実がある。一九二一年七月、人民革命軍がイヘ・フレール（一九二四年にウランバートルと改称）へ入城した当時、旧体制側と人民党側の妥協がはかられ、王制は維持された。しかし同年十一月、ボグド・ハーンと政府の間で協定が結ばれ、この時点でボグドの権限はきわめて制限された。政府は事実上、ボグドの承認なしに、あらゆる法律を制定し施行することができた。一九二三年には貴族の特権が廃止され、人民は少なくとも身分的には解放された。

三回党大会は、すでに人民共和国移行の方針が決定された後の一九二四年八月に開かれた。当時の委員長は

B・ダンザンだったが、党中央委の政治報告はダムバドルジによって行なわれた。大会全体を指導したのはダムバドルジ、リンチノ、ジャムツァラーノ等で、B・ダンザン、首相ツェレンドルジらの発言は少ない。大会は、党史のうえで、モンゴルの「非資本主義的發展の道」を決めたとして高く評価されている。

モンゴル史全体の流れからすれば、一九二四年で特筆すべき出来事は、党大会よりもむしろ十一月の第一回国大ホラルの召集と憲法制定である。一月二六日に採択された憲法は、民主主義に基づいて国家の基盤を強化してゆくべきだと述べると共に、「全世界の人民の目的は、現在の、帝国主義段階にある資本主義を根本からくつがえして社会主義、共産主義を志向することにある。よって、民主国家たるわが国の外交政策は、世界の弱小国や革命的人民の利益、目的に合わせて実行してゆくべきである」(第三条第14項⁽⁵⁾)とうたっている。

第一回国大ホラルは、大ホラル閉会の三日後の一月二九日に開かれ、小ホラル幹部会員にダムバドルジ、ツェレンドルジ、ゲンデンら五名を選出した。小ホラル議長にはゲンデンが選ばれた。⁽⁶⁾同時に、首相ツェレンド

ルジ⁽⁷⁾、副首相アマル、全軍評議会議長リンチノ、経済評議会議長アマガリーエフ、全軍司令官チョイバルサンをはじめとする閣僚会議構成員も選出された。

ダムバドルジ政権は、このように共和国成立と同時にスタートした。

3 内モンゴルからの働きかけ

辛亥革命の結果、内モンゴルは否応なしに中華民国に組みこまれたが、モンゴル人の情況は清代にもまして悪化していった。一九一四年の熱河、チャハル(察哈爾)、綏遠の三特別区の設置は、行政的にモンゴル人の領域をせばめる効果を持ったし、軍閥張作霖、馬福祥、閻錫山らの圧迫は、モンゴル人を困難な状態に陥れた。

一九二五年春にウランバートルを訪れた内モンゴル代表は、その報告の中で、内モンゴルの状態、とりわけ漢人の進出によりモンゴル人の生活領域が侵されている状態を具体的に語っている。同報告によれば、ジョソト盟、チャハル、西トウメドの全域、ジョーオダ盟の土地の八割、ジリム盟の土地の七割は漢人に奪われた。また、オランチャブ、イヘジョー両盟とフルンボイルの周辺に

は県が設置され、県の役人の支配を受けるようになった。⁽⁸⁾
同じ報告者は、その攻撃のほこ先をモンゴル人領主王公にも向けている。王公たちによる各種の、前近代的な賦役によって人民の暮しは極度に悪化していた。報告の最後の部分は、内モンゴル人民の外モンゴルに対する感情を巧みに表現している。

「同じモンゴル族のはらからのうち、内モンゴルの兄弟たちが苦しんでいる状況はこのようである。思うに、外モンゴルの兄弟たちは、天の助け、地の利、人の和、この三つを得て、しかも北からコミンテルンの援助を頼み、わずかの間にすべての暴虐者を倒し、民族の進むべき道を見つけ、平和な国をつくり出してきた。内モンゴルの同胞は、このありさまを暗黒の地獄の底から日の光を仰ぎ見るようにながめている。」⁽⁹⁾

内モンゴル側からの外モンゴルに対する援助要請は、少なくとも三グループ、すなわちバルガ(フルンボイル)、オルドスのグループ、およびジョソト盟(を中心とする)グループからなされた。ダムバドルジは、第四回党大会(一九二五年九月二三日〜一〇月一日)における政治報告の中で、これらのグループとの関係について

述べている。

先ず、バルガの革命家との接触は、一九二三年冬に始まったという。四回大会議事録の新版（一九七八年）は、二三年冬にバルガから数人がやって来て党のイデオロギ―に共鳴して帰り、故郷で宣伝活動を行ない数十名のメンバーを集めた、とのみ記している。⁽¹⁰⁾ところが、この部分分を旧版（一九二六年）と比較すると、新版では本質的に重要な箇所が故意に削除されていることがわかる。事実はフレ―（ウランバートル）を訪れた数人は単に党のイデオロギ―に共鳴しただけでなく、モンゴル人民党に入党した。彼らはグループを拡大した後、一九二四年夏に再び数名をウランバートルへ送り、党学校、軍学校へ入学させた。それだけでなく、バルガのグループは、モンゴル人民党の東支部、つまり党の支部として正式に認知されたのだ⁽¹¹⁾。

バルガ・グループがいかなる人物によって指導されていたかについて、ダムバドルジは何も述べていない。だが党の第二回大会（一九二三年七月八月）、第三回大会、第四回大会のいずれにもボヤンゲレル（福明泰）⁽¹²⁾がバルガ代表として出席しているので、このボヤンゲレルが指

導者の一人であったことは疑いない。また、他の多くの資料から判断してメルセー（郭道甫）も早い時期からグループを指導していたはずだ。

オールドス・グループと外モンゴルとの接触について、ダムバドルジ報告はあまり具体的には述べていない。内モンゴルの研究者によれば、イヘジョー盟ウーシン旗（ホショー）のシネラマ（本名ウルジージャルガル）は、約一五名の仲間を伴って一九二四年秋、ウランバートルに到着した。⁽¹³⁾

このウーシン旗は、清代の一八五八年に「ドゴイラン運動」と呼ばれる独特な牧民運動の形態を創出した、長い闘争の歴史を持つ地域である。今回の闘争の指導者シネラマは、辛亥革命後に同旗で一一のドゴイランを組織し、一九一九年に逮捕された。彼は翌年に脱走して北京へ逃げ、ジャサグ旗出身のドゴイラン運動指導者ワンダンニヤムと知り合った。⁽¹⁴⁾後に内モンゴル革命軍司令官になるワンダンニヤムは、一九二一―二三年にオールドスで大規模なドゴイラン運動を組織したことがある。この時期は、ボグド・ハーン政府が内モンゴル解放戦を遂行していた時期に当り、ワンダンニヤムも外モンゴルと接触

をもった⁽¹⁵⁾。

ワンダンニヤムはシネラマに、人民共和国が成立したばかりのモンゴルへ行き、政治学習をし、同時に援助を要請すべきだと助言した⁽¹⁶⁾。そこでシネラマは、故郷ウーシン旗に帰り、ドゴイラン運動の仲間を伴って外モンゴルへ向ったのである。彼はウランバートルの党学校で学習した後帰国し、一九二五年一〇月の内モンゴル人民革命党第一回大会で中央委員に選ばれた。

最後に、ジョソト盟（を中心とする）グループとの接触についてみることにしよう。ダムバドルジは次のように報告している。「中国国民党中央委員をしているある人物が、内モンゴルのジョソト盟の地で秘密裡に内モンゴル国民党（Dorjyadu Mongyol-un Uus-un Arad-un Nam）を作り、党員をつのった。さらにその人物は、一九二五年陰曆三月にウランバートルを訪れ、党中央委でそれまでの活動の報告をし、将来の計画を語って帰った⁽¹⁷⁾」

この中国国民党中央委員が後の内モンゴル人民革命党委員長チュレンドロブ（白雲梯）を指すことは、疑いの余地がない。ジョソト盟ハラチン旗出身の内モンゴル

革命指導者には、外にアルタンオチル（金永昌）、マンダルト（李丹山）などがあるが、国民党幹部はチュレンドロブだけである。彼は一九一八年、広東の非常国会議員に選ばれ、一九二四年一月、国民党第一回大会で中央委執行委員候補に選出されている。

一九二四年冬、このチュレンドロブのグループを中心に北京で準備会議が開かれた。この準備会議で内モンゴル人民革命党が成立し臨時執行部が設けられたことは、一九二五年七月にウランバートルを訪れた同党代表の報告やモンゴル人民革命党第四回大会におけるチュレンドロブの発言から裏付けられる⁽¹⁸⁾。臨時執行部の顔ぶれは、チュレンドロブ、恩和巴図、アルタンオチル、メルセー等であった⁽¹⁹⁾。この時点で、それまで別々に行動していた複数のグループが一つにまとまった。

ところで現在の内モンゴルの研究者は、一九二四年末に組織された内モンゴル人民革命党は、中国共産党の李大剣の発議に基づきコミンテルンの承認のもとに作られた、と述べている⁽²⁰⁾。当時、トゥメド地方から北京蒙蔵学校に入学したウランフ、奎璧、吉雅泰、多松年、李裕智らが共産党に入党して活動していたことは事実だし⁽²¹⁾、こ

のうちの何人かは一九二五年一〇月の張家口大会で中央委員に選ばれている。したがって二四年末の段階で共産党員が内モンゴル人民革命党に加わっていた可能性は充分にある。けれども当時の共産党員が強い発言力を持っていたとは考えにくいし、李大釗の役割を過大評価するのは危険である。

ここで、一九二四年冬に成立した党の名称について検討しておく必要がある。問題は、「一九二五年五月、Dotuyadu Mongyol Uus-un Arad-un Nam が Dotuyadu Mongyol-un Qubisgalku Arad-un Nam に改称した」というダムバドルジの報告をどのように理解するかである。この改称は二通りに解釈できる。一つは、内モンゴル国民党が、新たにできた内モンゴル人民革命党に正式に合流したと考える見方。もう一つは、二五年三月に外モンゴルで人民党が人民革命党に改称したのに習い内モンゴルの党にも「革命」を付したとみる見方である。後者の見方をとれば、「一九二四年冬に内モンゴル人民革命党が成立」という表現は不正確で、二四年冬の時点での名称は内モンゴル人民党だったということになる。

いずれにせよ、臨時執行部が成立したあと、革命運動

は高揚する。二五年三月には内モンゴル各地に代表が派遣され、本格的な宣伝活動が始まった。七月の報告は、当時すべての盟に党委員会ができ、党員は三百名以上、党員候補は三千名以上になった、と述べている。同報告によれば、党とは別に「モンゴル民族復興会議」という大衆組織が作られ、そのメンバーは一人近く達した⁽²³⁾。

こうして、党の第一回大会を開く条件は整った。ここで確認しておくべきことは、内モンゴルの革命家が常に外モンゴルと連絡をとり援助を求めていたという事実である。

4 張家口大会とその後の推移

一九二五年一〇月、張家口で内モンゴル人民革命党第一回大会が開かれた。大会には、六盟（ジリム、ジョソト、ジョーオダ、シリインゴル、オラーンチャブ、イヘジョー）、チャハル、バルガ、ダグール、ソロン、アラシャン、エジナ、ウールド、青海の代表百名以上に加え、国民党、馮玉祥の国民軍、コミンテルン、中国共産党、および外モンゴルの代表がそれぞれ参加した⁽²⁴⁾。

ダムバドルジは、ボヤンネメフと共に外モンゴル代表

として自ら参加し祝辞を述べた。⁽²⁵⁾

大会はチエレンドロブを委員長、メルセーを書記とする中央委員会を選出した。執行委員の数と顔ぶれに関しては、文献によって若干の食い違いがある。先ず、アルタンオチル、ボヤングレル、モランガ（衆景濤）、サインバヤル（包悅卿）、マングルトが執行委員に含まれることは、本稿の冒頭で紹介した写真からも明白である。

問題は、当時の信頼すべき資料が、チチンビリクト、アルタ、ワチャルの名前を挙げていることである。⁽²⁶⁾これらのうち、チチンビリクトは旬刊雑誌 *Dorjyadu Mongyol-un arad-un sedkai* の主筆、アルタは同編集者で、二人とも外モンゴル出身だとされている。

ツェツェンビリクト (Cecenbilitü, 内モンゴル発音はチエチェンビリクト) がボヤンネメフのペンネームであることは、現代モンゴル文学史の基本知識に属する。ボヤンネメフは少年時代に、内モンゴルのジリム盟出身の伝説的な反漢民族運動指導者トクトホ・タイジからモンゴル語、漢語の読み書きを習った。⁽²⁷⁾したがって、彼は内モンゴルの状況によく通じていたと考えられる。ボヤンネメフが内モンゴル人民革命党中央委の執行委員に選ば

れ、雑誌の発行に従事していた事は、今日の外モンゴルでもよく知られている。チチンビリクトが執行委員であれば、もう一人のアルタもやはり執行委員だったと考えてよからう。アルタは阿拉騰と写している場合もあるのだ、正しくはアルタン (Altan) だと思われる。当時の外モンゴルの知識人の中から、出版の経験があり、漢語の知識も有し、しかも執行委員に任命されるにふさわしい人物を探すとすれば、その対象は自ら限定されてくる。アルタンという名前を手がかりになると、バヤニー・ナムスライ、通称アルタン・ナムスライの名前が浮んでくる。この人物は、一九一〇年代にハルビンで『モンゴリオン・ソニン・ビチグ』の発行に従事し、革命後は党の機関紙『オリヤール』『ニスレリン・シネ・ソニン』の編集長を務めた。⁽²⁸⁾彼は内モンゴルで革命党の機関誌の編集を担当するには、うってつけの人物であった。断定はできないけれども、アルタンはこのナムスライを指す可能性が強い。もう一人のワチャル、正しくはオチルは、コミンテルン代表オチロフ (ブリアート人) を指しているとみて間違いないだろう。彼は上記写真にもダムパドルジのとなりて写っている。

外モンゴル出身者二名が執行委員に選ばれた事實は、現在の内モンゴルの研究者によって完全に無視されているけれども、ダムバドルジ政権の内モンゴル援助を考えるうえで本質的に重要である。ダムバドルジ政権は、内モンゴル人民革命党をイデオロギー面で強化しようとした。当時の日本のある外交官は「該党ノ漢文宣伝ハ極メテ温和ナルモノナルモ蒙古文ハ革命思想ヲ蒙古人ニ注入スルニアリ 其ノ旬刊機関紙 *arad-un sedvii* ニハロシア革命ノ状況ヲ述ヘ外蒙古事情ヲ宣伝シ内蒙古王公廃止ノ小説ヲ掲クル等過激思想革新思想ヲ滿載セリ」と報告していた。⁽²⁹⁾

大会の採択した宣言は、内モンゴル人民がモンゴル王公や中国軍閥の支配のもとに苦しんでいる現状を述べ、党のもとに結集してモンゴル人民の解放のために闘おうと呼びかけた。同宣言によれば、党の目標は、辛亥革命の精神——五族共和——を実現し、完全な自治を可能にすることであった。党の当面の課題として、暴虐者（即ち王公）による旗支配を終らせること、旗の行政権を人民に渡し民主的選挙を実行すること、内モンゴル人民代表大会を開催すること、この三点が強調された。⁽³⁰⁾

宣言に關して特記すべきは、「ソ連と外モンゴルのみが抑圧されている弱小国の友である」という表現がみられることだ。⁽³¹⁾

外モンゴルの内モンゴル人民革命党に対する援助は、具体的には、資金・武器援助、内モンゴル革命家のウランバートルでの教育等の方法で行なわれた。第四回党大会の報告によれば、党は過去一年間に二万トウグリク（当時の党の収入は七万トウグリク程度）を内モンゴル革命のために出費した。また一九二六年、党中央委は、銀五萬元を党予算の中から出費することを決議した。⁽³²⁾

要員の教育の面では、一九二五年末に四〇名以上の活動家をウランバートルの党学校で教育した。彼らは一九二六年秋に包頭に作られた内モンゴル軍官学校の中核になった。⁽³³⁾

以下、張家口大会以降の内モンゴルの革命運動を簡単に追うことにする。

一九二六年一月一三日、北京で内モンゴル各盟旗各団体代表大会が開かれ、三月に内モンゴル国民代表大会を北京で開催することを決定した。続いて同月一六日、やはり北京で内モンゴル国民代表大会準備委員会が組織さ

れ、チェレンドンロブ、メルセーが委員長、副委員長に就任した。代表大会開催に関する宣言は内モンゴル各地に送られ、二月下旬には代表も到着し始めた。⁽³⁵⁾この段階までは、内モンゴル人民革命党を中核とした自治運動は、たいへん順調に進行していた。ところが三月以降、情勢が激変し、計画は大幅に狂い始め、やがて破局を迎えることになる。

一つのポイントは馮玉祥の動静である。当時、馮は北京からチャハル、綏遠両特別区、甘肅までを自己の勢力範囲としていた。それゆえ、内モンゴル人民革命党の張家口、北京を中心とする活動は、馮の支持なしには不可能だった。ところが二六年三月、馮玉祥の国民軍と張作霖・呉佩孚らの軍の戦闘が激化した。このため、予定されていた内モンゴル国民代表大会の開催は、延期を余儀なくさせられた。同年八月、国民軍は南口で敗れ、内モンゴル西部へ撤退した。内モンゴル人民革命党指導部も国民軍に従って包頭へ移り、一二月にはやはり国民軍と共に寧夏（現銀川）へ移動した。この結果、党の活動の中心は内モンゴル西部に限定されることになった。

内モンゴル革命軍総司令官ワンダンニヤムの死（二六

年秋）は、二番目の打撃だった。彼はドゴイラン運動の指導者としても、「宗教之首領」⁽³⁶⁾すなわち活仏としてもオルドス全域に絶大な影響力を持っていた。旗の間のつながりがきわめて弱かった当時にあつては、ワンダンニヤムのような指導者の存在は、力を結集するうえで、どうしても欠かせなかった。彼の死によってイヘジョー盟での党の活動はかなり制約された。

それでも、内モンゴル人民革命党の活動の中で最も目ざましい成果をあげたのは、イヘジョー盟ウーシン旗の闘争である。ウランバートルから戻ったシネラマは、張家口大会後、一九二六年二月にウーシン旗に帰り宣伝活動を開始した。いったん敗北した後、同年秋、再び活動を開始し、一二月には旗党委員会を組織した。この間にソ連とモンゴルから計五百丁の歩兵銃が包頭に届けられ、そのうち百丁はウーシン旗に配分された。二七年二月、シネラマの軍は、ジャサグ（領主）と軍閥井岳秀の派遣した軍を撃破し、王府を占領して「公会」を設立した。ジャサグは旗外に逃亡し、この「公会」が行政、司法、軍事の全権を掌握した。⁽³⁷⁾

内モンゴル人民革命党の運動にとって最大の打撃は、

蒋介石の四・一二クーデターによる国共合作の解消である。国民党との共闘が不可能と判断したコミンテルンは、中共八・七緊急会議と同じ時期に、内モンゴル問題検討のための特別会議をウランバートルで開くことを提案した。

ウランバートル会議は、一九二七年八月一〇日頃からコミンテルン代表アマガージェフの主宰の下に開かれた。旧執行部のチェレンドンロブ、メルセー、アルタンオチル、ボヤンゲレル、マンドルト、モランガの外に、イヘル、ジョー、オラーンチャブ、ジリム、ジョソト各盟、チャハル、フルンボイルから代表が会議に参加し、その数は四〇名を越えた。注目すべきは、モスクワのクートヴェや中山大学に学ぶ内モンゴル人学生ボヤントクトホ（ウルジョオチル）、ホルロー（白永倫）⁽³⁸⁾らも出席していることである。

モンゴル人民革命党からはダムバドルジが出席した。会議では内モンゴルにおける党の活動の総括がなされた。その過程で、党の主導権をめぐる、チェレンドンロブら「ハラチン派」（ジョソト盟グループ）とメルセーら「ダグルル派」（バルガ・グループ）の争いが表面化した。

同会議に出席したボヤントクトホの回想によれば、両者の争いを調停したのはダムバドルジだった。ボヤントクトホの観察では、ダムバドルジは、蒋介石の国民党は短期間で中国を支配し、モンゴル人民共和国に攻めこんでくる可能性がある、チェレンドンロブとメルセーを温存しておけば、二人を国民党との交渉に使ってモンゴルの利益を守ることができると考えていた。⁽³⁹⁾

特別会議が進行する中で、委員長と書記を非難する声⁽⁴⁰⁾が優勢になり、新しい執行部が選ばれることになった。執行部メンバーとして委員長ムンフウルジー（ウーシン旗）、書記ホルロー、執行委員ボヤンゲレルらの名前があげられた。この提案によれば、チェレンドンロブとメルセーは中央委員に格下げとなり、旧執行部のアルタンオチル、マンドルトらは中央委から追われることになった。このような新執行部のリストが示された時、それまで沈黙を守っていたダムバドルジは強硬な反対意見を述べ、チェレンドンロブらを執行部に残すよう主張した。代表たちが動揺した時、コミンテルン代表アマガージェフは、内モンゴル人民革命党の事は内モンゴル人民党が自主的に決めるべきだと強調してダムバドルジの介入を退

けた。⁽⁴⁰⁾

新執行部選出のあと、チュレンドンロブ、アルタンオチル、マンダルトらは、ダムバドルジの援助で寧夏へ戻り、「内モンゴル国民党反共宣言」を出し、公然とコミンテルン、ソ連を攻撃し始める。こうして内モンゴル人民革命党は完全に分裂し、別々の道を歩むことになる。

寧夏へ戻ったグループは国民党と合流し、ある者は後に、日本を後ろ盾とする自治運動に加わることになる。ウランバートルに残ったメンバーのうち、バルガ・グループは翌二八年、ハイラルで武装蜂起し敗北する。

いずれにせよ、張家口大会の路線に沿った内モンゴル人民革命党の活動は、ウランバートル会議をもって、事実上終結した。

5 内モンゴル革命援助の性格

ダムバドルジは第四回党大会（一九二五年）の報告の中で、党の対内モンゴル革命援助の理論的根拠として、第三回党大会の決議の次の部分を引用した。すなわち「モンゴル系の諸族と関係を結び、全モンゴル族を統一する」という課題は、わが党の重要な課題である。しかる

に、現在に至るまで、バルガ、内モンゴル、ウリヤンハイ等の、われわれと宗教、習俗を同じくするモンゴル族と関係を結び、統一することができないでいる。（中略）よって中央委員会は、その時どきの情勢、状況に応じて、任意の可能な方策を探り、この事業をさらに前進させるべく努めるべきである」⁽⁴¹⁾

モンゴルによる一九二四〜二七年の内モンゴル革命援助は、モンゴルの国際主義的な活動として今日のモンゴル人民共和国の研究者からも高く評価されている。ただ、国際主義といっても、相手が同じモンゴル民族だけに、常に汎モンゴル主義との違いが問題にされる。つまり、ダムバドルジ政権は、中国における国民革命運動の一環としての内モンゴル革命を援助したのか、それとも一九一〇年代のモンゴル統一運動の延長線上に立って内モンゴルを助けたのか？

右で引いた党大会決議は、内モンゴル援助がモンゴル統一という目標のために実行されたことを物語っている。だが、この問題をさらにはっきりさせるためには、モンゴル人民革命党のモンゴル統一に関する政策、特に党の綱領を分析してみる必要がある。

モンゴル人民党第一回大会（一九二一年三月）で採択された第一次党綱領は、次のような項目を含む。

「将来、モンゴル民族がみな一緒になり一つの国家を形成するようになることを望む」（第二項）

「中華民國は人口がきわめて多く、省や民族の数も多いため、いくつかの集団がそれぞれ自治国をつくり、それらが互いに条約を結び、中華連邦国家になるべきである。わがモンゴル族もこの連邦に加わるのを拒む理由はない。華南、華北、四川、チベット、回疆、満州、モンゴル等がそれぞれ公正な自治政府を樹立し独立して、その後、それらが一緒になって連邦国家を樹立したならば、互いに抑圧することもなく、外国の侵略から防衛するのにも都合である」（第三項⁽⁴²⁾）

このように第一次綱領の段階では、モンゴル民族の統一と中華連邦への加入が考慮されていた。ただ注意すべきは、モンゴル民族の統一が無条件の優先課題だったのに対し、中華連邦への加入に関しては、いくつかの留保条件がついていた事である。

党の第二次綱領は、第四回党大会（一九二五年）で採択された。この第二次綱領には、モンゴル族統一に関する

項目はない。同大会決議はむしろ、モンゴル統一をすすめようとする路線を批判している。すなわち「モンゴル族自身の希望を考慮せず、無理やりに統一しようという勢力は、東方の諸国、とりわけ中国における、民族解放のための国民革命などの事業を調整し統一するという仕事に害を及ぼす⁽⁴³⁾」

この決議は、コミンテルンの方針を強く反映していると考えられる。というのは、コミンテルン代表アマガーエフは、党の綱領に関して意見を述べる中で、次のような発言をしているからである。「ハルハ・モンゴルを中心にして他のモンゴル諸族を必ず統一すべきだと誤って理解し説明する者がいるが、これは好ましくない。もしそのようにしたならば、大モンゴル国建設という危険なコースに入ってしまう。外モンゴルは、他のモンゴル族の意向とは関係なく、モンゴル諸族とその領域を統一すべきだ、という意見は誤りである。全モンゴル族の統一は、すべての民族が自由を獲得した後で互いに話し合って決定すべきことである⁽⁴⁴⁾」

アマガーエフは特定の人物の名前を挙げていないけれども、この発言がリンチノ批判だという事は、他の資料

から推定できる。

一九二〇年以来、モンゴルの党の最高顧問的役割を果してきたブリヤート人リンチノは、一九二五年にソ連へ移り、二度と戻らなかつた。リンチノの出国の原因は、ダムバドルジが第七回党大会中の発言の中でリンチノとコミンテルン代表が対立したと述べている事からも分かるように、⁽⁴⁵⁾ ルイススクーロフやアマガーエフとの対立によるものと理解して間違いないだろう。

コミンテルン執行委員会東方部が一九二六年一月二三日にモンゴル人民革命党に送った決議の第一五項は、「同志リンチノを今後モンゴル問題に関与させないよう⁽⁴⁶⁾にすべきである」と述べている。

リンチノとルイススクーロフらの対立の原因は、モンゴル統一に関する問題だった。リンチノのパンモンゴリズム論は、彼の一九二七年の論文「中国革命との関連におけるモンゴル民族自決問題」にくわしく述べられている。リンチノによれば、モンゴル民族は一三世紀前半のチンギス・ハーンの時代から、一七、八世紀に清に征服されるまでの間、一定の領域を持っていたし、伝統的に牧畜という生業形態を共有し、現在においても共通の利害関

係を持っている。辛亥革命後のイヘ・フレーの独立宣言は、単に外モンゴルだけに関わるのではなく、全モンゴル族の独立を意味した。その思想はモンゴル人民党の綱領にも引き継がれたのであり、内モンゴル革命援助もその延長線上にある。リンチノはこのように述べてからさらに、東モンゴルと南モンゴルの革命組織は、一九二三〜二四年に外モンゴル人民党の部局として成立し、それが内モンゴル人民革命党に成長したと断定している。⁽⁴⁷⁾

リンチノの構想するモンゴル国は、中華連邦共和国の一部を構成するという点において、党の第一次綱領の理念をそっくりそのまま受け継いでいた。一九二四年五月の中ソ協定さえ、モンゴルが中国の一部を構成すべきだという主張を正当化するために、引き合いに出されている。

ここで中華連邦という考え方について改めて検討する必要がある。肝心なことは、リンチノの構想していた連邦は、解放された各民族が平等の資格で参加する新しい形態の連邦だという事である。しかもリンチノは、一九二二年に成立したソビエト連邦を念頭においていた。⁽⁴⁸⁾

ソ連憲法がうたっているように、当時の共産主義者たち

が理想としていた国家は、すべての勤労者が構成員となる世界社会主義ソビエト共和国だった。この点を見過ぐすと、リンチノの主張は、『中華民国への復帰』と誤解されかねない。

ところで、リンチノとルイススクーロフらが対立した時に、ダムバドルジはどういう態度をとったのだろうか？ この事は、ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助の性格と直接関わってくる。

ダムバドルジは、第七回党大会中の発言の中で、彼がコミンテルン代表ルイススクーロフ、アマガーエフと意見を異にしたことを自ら認めている。⁽⁴⁹⁾ また、コミンテルン執行委員会東方部の一九二五年八月一七日の決議は、モンゴル人民革命党がコミンテルンの同意なしにルイススクーロフを帰国させた事に対し強い警告を発している。⁽⁵⁰⁾

上記のダムバドルジの発言やコミンテルンの文書から判断して、ダムバドルジは、リンチノを擁護し、ルイススクーロフを追放する側に回ったのだと思われる。しかもこの推定は、ダムバドルジが第四回党大会の報告の中でモンゴル統一に関する第三回党大会決議を改めて引用した事、あるいは一九二七年以降コミンテルンとダムバド

ルジ政権の関係が極度に悪化した事などの事実から充分に裏付けられる。

モンゴル統一という政策は、党の綱領から除かれたことよって公式には否定されたが、その理念自体は、党の指導部によって受け継がれた。ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助も、この理念に基づいて実行されたとみてよいであろう。

いづれにせよ、中国で国共合作が順調に進行していた時期には、外モンゴルは、国際主義という大義名分の下に内モンゴル革命援助を行なう事が可能だった。

6 おわりに

本稿で扱った問題は、今日の内外モンゴルでもきわめてデリケートな性格を有する。中国領の内モンゴルの研究者は、内モンゴル人民革命党に外モンゴル代表が加わっていた事を隠しているし、モンゴル人民共和国の研究者は、党大会議事録の新版を編纂するに当ってバルガの革命組織が外モンゴルの党の支部だった事を示す箇所を故意に削除している。

右のような事情から、ある意味では、内外モンゴルの

革命家が民族解放のために手をとりあって闘った歴史の記述は、第三者たる外国の研究者の手に委ねられている。

筆者が本稿で示したかったのは、ダムバドルジ政権が内モンゴル革命援助のために強力なイニシヤチブを発揮した事実と、援助を促したナショナリズムの存在である。本稿では紙数の関係上あまり触れられなかったが、外モンゴルの内モンゴル援助を可能にした大きな要因は、当時の国際情勢である。ダムバドルジ政権末期の国際情勢の変化、すなわち中国における国共合作の失敗、日本帝国主義の脅威の増大、ソ連におけるスターリン体制の確立等によって、モンゴル人民共和国の対外政策は方向転換を余儀なくさせられる。この問題は稿を改めて論ずる予定である。

- (1) И. И. Генкин. Два съезда Монгольской народной партии. «Новый Восток» № 12 (1926), с. 191. 写真の解説は坂本是忠「第一次国共合作期における内蒙古民族運動」『近代中国研究』第六輯（一九六四年）九八頁参照。
- (2) Намын Туухийн Институт. Монгол Ардын Хувьсгалт Намын Товч Гүүх. УБ., 1970, 117—130 тал.
- (3) Д. Даш. 1925—1927 оны Хятадын хувьсгал, МА-

ХН-ын интернационалч боллого. 《МАХН-ын түүхийн асуудал》 № 12 (1977). (以下、Даш 1977 年略記)

(4) タンゼンは一九二三年末から二四年春にかけて北京、広州を訪れ、馮玉祥、孫文らと会見した。なお、タムズルジが二四年初めに孫文と会見したとする一部の研究書の記述は誤り。

(5) Буял Найрамдах Монгол Ард Улсын Их Баян Хурлын голлоод, Үндсэн хууль, гүнхгүүд. УБ., 1956, 31 тал.

(6) タムズルジ指導部を批判したため、一九二七年に解任。後任はダムゼインヌレン。

(7) 一九二八年二月に病死。後任はマヤル。

(8) Монгол Ардын Хувьсгалт Намын Дөрөвдүгээр Их Хурал. УБ., 1978 (以下、IV Их Хурал 年略記), 49—50 тал.

(9) IV Их Хурал, 50 тал.

(10) IV Их Хурал, 49 тал.

(11) *Mongol Arad-un Qubisgali Nam-in Dorbedüger Yeke Qival*. Улаанбаатар, 1926 (以下、IV Yeke Qival 年略記), p. 63.

(12) 文献によってはボヤンデルゲル、富明泰。

(13) 郝維民「第一次国内革命戦争时期的内蒙古人民革命党」『中国蒙古史学会成立大会紀念集刊』(呼和浩特、一九七九年)六〇〇頁。

- (14) 趙相璧「席尼喇嘛事略」『蒙古族歴史人物論集』(北京、一九八一年)二九八—三〇〇頁。
- (15) Cimeddorji, "Duryulang-un ködelgegen-ü tuqai," *Mongol Teyke Kale Bitig* 1958: 1 (23), p. 53.
- (16) 趙相璧「前掲論文」二九九頁。
- (17) *IV Yeke Qural*, pp. 63—64. この箇所は「新版では削除された」。
- (18) *IV Их Хурал*, 50 тал; *IV Yeke Qural*, p. 14. なお新版では Ч. Хонгорон-оныхов の名前が削除されている。
- (19) 小川繁『内外蒙古に対する露国の活動』(東亜経済調査局、一九三〇年)四九頁。
- (20) 郝維民「前掲論文」五八三頁。
- (21) 吉雅泰「李大劍同志和內蒙古初期的革命活動」『回憶李大劍』(北京、一九八〇年)一七〇頁。
- (22) *IV Yeke Qural*, p. 64.
- (23) *IV Их Хурал*, 50—51 тал.
- (24) Dotyradu Mongol-un Arad-un Qubisqaltu Nam-un Tob' Qoriv-a, *Dotyradu Mongol-un Arad-un Qubisqaltu Nam-un Nigedägen Yeke Qural-ača olan hämen arad neyite-dür imaqatın jarlaqu bitig* (発行地・発行年の記載なし以下「*jarlaqu bitig*」略記), p. 1; 郝「前掲論文」五八三頁。
- (25) Дамбаドルжは一〇月四日に張家口に到着したらしい。この日の馮玉祥の日記は張允榮のウランバートルからの挿

入、Дамбаドルжとの会食について記している。下記参照。
『馮玉祥日記』第二編(北平、一九三二年)卷六、一一一頁。祝辞の内容は「外務省記録『滿蒙政況關係雜纂(內蒙古關係)』第一卷所収の藤野進報告「內蒙古自決運動ニ就キテ」参照。

- (26) 藤野進「同報告」。
- (27) Ц. Дамдинсүрэн. Зохиолчдын бүлгэмийн үүссэн тухай тэмдэглэл. 《Ярууи》1978, 8 тал. Хонгорон-оныхов-ийн үүсчиг нь「田中克彦『草原の革命家たち』(中公新書、一九七三年)七—一五頁参照」。
- (28) Г. Содномдаржаа. Монгол ард угсын ном хэвлэлийн хурангуй түүх. УБ, 1965, 8 тал; А. Дашням. Оюун бигийн ордны ойлого. УБ, 1981, 84—87 тал.
- (29) 藤野進「前掲報告」。
- (30) *jarlaqu bitig*, pp. 3—4, 15.
- (31) *jarlaqu bitig*, pp. 5—6.
- (32) *IV Их Хурал*, 275 тал.
- (33) Даш 1977, 153 тал.
- (34) Даш 1977, 153 тал.
- (35) 藤野進「前掲報告」。
- (36) 張国忱編訳『蘇聯陰謀文証彙編』(北京、一九二八年)三特別区及蒙古事項類「蘇聯密探奧赤羅夫報告」。
- (37) 趙相璧「前掲論文」三〇—三〇三頁。
- (38) 郝維民「前掲論文」五九二—五九三頁。

- (39) 烏勒吉敖喜爾憶述、劍羽孫力整理「特別會議——憶一九二七年内蒙古人民革命党中央委員会擴大會議」『草原』一九八二年第三期、六八一—六九頁。
- (40) 烏勒吉敖喜爾、同回想「七一頁。郝維民、前掲論文、五九三頁。なお、この頃からダムバドルジとアマガーエフの關係はますます悪化し、アマガーエフは党中央委幹部会への出席を拒否されるようになる。ロシヤ特派員としてこの職務を果せなくなったアマガーエフはモスクワへ召還され、二七年末ライテルが代りに派遣される。
- (41) *IV Yeke Qural*, p. 64. この部分は新版では削除される。
- (42) Монгол Ардын Хувьсгалт Намын Нэгдүгээр Их Хурал. УБ, 1971, 28—29 тал.
- (43) IV Их Хурал, 109 тал.
- (44) IV Их Хурал, 97 тал.
- (45) *Mongol Arad-un Qubisgaltu Nam-un Dolodугар Yeke Qural-un asaгuilla qariгuilla-yin qabswrala* II. Улс-аранбайгагтур, 1930 [『ソビエト VII Yeke Qural』略記], p.

271.

- (46) Монгол Ардын Хувьсгалт Нам ба олон утсын коммунист хөдөлгөөн (1920—1977). УБ, 1979 [『ソビエト ОУКХ』略記], 270 тал.
- (47) Ринчино. К вопросу о национальном самопре-длении Монголии в связи с задачами китайской революции. 《Революционный Восток》 № 2 (1927) [『ソビエト Ринчино 1927』略記], с. 66—70, 74. 東モンゴル、南モンゴルはそれぞれ、バルガとオールドスを指すと思われる。バルガとオールドスの代表が外モンゴルとの合併を希望した事については下記参照。Автономный район, Внутренняя Монголия Китайской Народной Респуб-лики. М., 1980, с. 27.
- (48) Ринчино 1927, с. 75.
- (49) VII Yeke Qural, p. 286.
- (95) ОУКХ, 262—263 тал. (日本學術振興会奨励研究員)